グレイシャスオンライン

再生紙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
グレイシャスオンライン

【Ｎコード】
Ｎ３６８５Ｚ

【作者名】
再生紙

【あらすじ】
遂に発売されたＶＲＭＭＯ、グレイシャスオンライン、そのゲームに入った俺はとんでもない事件？　に巻き込まれる。
「え？　怖いじゃん。モンスター、俺は訓練所に残るよ」
この少年の運命は……

プロローグ

このゲームを初めてから1年、何故かは知らないがログアウトボタンが消え失せていた。
始めは何かのバグやトラブルかと思っていた。だが1年経った今でもログアウトが出来ないという状況、そしてこのゲームを抜け出す方法はただ一つしかない――！

そして俺は1年間、モンスターと戦わずにずっと訓練所で過ごして来ていた。
死ぬ恐怖が無かった訳ではない、あったにはあったが実感が沸かなかったのだ……
左の腰には訓練所で貰った短く上に反り上がっている片手剣、そして背中にこれまた訓練所で貰った長い片手直剣、目の前には初めて見るモンスターの姿、モンスターの名前の上にそっけなく伸びているＨＰゲージ、俺は目の前のモンスターを相手に左腰にある片手剣を抜く。
今回が初めての実戦だ。

姿勢を低くして臨戦態勢を整える。１年間素振りや動き回る擬似モンスターを斬り伏せてきた馴染みのある態勢、
実戦は訓練のように、訓練は実戦のように――！
息を大きく吐いて一気に足を踏み込む。直後、すごい勢いで加速して目の前にモンスターが迫る。
「はっ――！」
目の前にいるモンスターは反応できずにそのまま片手剣の餌食になっていた。

「1年間の賜物か……」

俺は苦笑いしながら剣を腰に納める。
その一連の行動は決して遅い訳ではないが速い訳でもない、ただ単に無駄が無い。
１年間素振りをしたりして上げた片手剣の熟練度はとてつもなく多くなっているだろう。
ウインドウを操作して初めて貰ったドロップアイテムを一瞥すると片手剣を左腰にしまう。

「このくらいじゃ弱いかな？　もっと強い奴に行くか」

何を隠そう俺はずっと訓練所に篭もっていた為モンスターの強さが分からなかった。
俺とは違い、皆はもう１０日経ったくらいから訓練所を卒業して普通にモンスターを狩っていたのだから……

だが一つだけ確信出来る事と言えば俺はこの１年間のほとんどを訓練に当てた為、努力した時間なら誰にも負けていない事くらいだろう。

……くだらない事だったか？
見上げると真っ青な青い空が見えていた。だが所詮この空だってただのデータかもしれないのだ……。
どっちにしろ現実の空かどうかなんて俺達には分かる訳もないが……
サラサラと砂になったモンスターを一瞥して狩場の奥に入っていった。

第1話

２０３０年、遂に俺が待ち焦がれていたゲームが発売された。そのゲームは２Ｄなんて古めかしい物じゃない。
これは擬似的に世界を作り出しその中に完全にフルダイブ出来るシステムが搭載されたゲーム、俺はこのゲームを買うために昨日の早朝から店頭に並び、日曜日の今日やっと購入できたのだ……
お金はお年玉を３年分繰り上げて貰ったが全然苦にならない程嬉しい。

完全フルダイブシステム搭載の実力制ＶＲＭＭＯＲＰＧ、
その名も《グレイシャスオンライン》――！

俺は家に帰ると速攻で準備を始める、早くやりたくて堪らない。
箱を開けると大きくて黒い物体……その物体にコンセントを差込み物体から出ている無数のコードみたいな物を指定された身体の位置に貼り付ける。
そして最後に付属のヘッドホン……というよりマスクを取り付けて準備完了だ。
そのままベットに横になって手探りで黒い物体の赤く光るボタンを押すとヴゥンと音がして目の前に英語の文字が浮かび上がる。
ロードが完了して目の前が白い空間になり何処からか声が聞こえてくる。

「名前を音声で発音してください」

「藤堂玲（とうどうれい）」

名前を発音するとまたもロードをしている。やがてロードが終わっ

たようで、

「藤堂玲様、グレイシャスオンラインを開始します」

女の人の機械音が聞こえてくる。かすかに感覚が遠のく感じがして気持ち悪い。思わずめを閉じてしまう。目の前が明るく賑やかになるのを感じ目を開くと現れたのは広場みたいな場所だった。
真ん中に噴水があってその周りには大勢のプレイヤーが固まっていてとても賑やかだった。俺は自分の手を見て軽く動かしてみる。
自分の感覚で動くのが分かる。ボタンやリモコンでは分からないような感覚が俺の気分を高揚させていた。

このゲームで最初にする事は職業選択だ。これは誰にだって言えることである、俺はウインドウを開いて職業を選ぶ。
このゲームの職業と言えば大きく分けて２つしか存在しない。
戦士、魔法使い……なろうと思えば鍛冶職などにもなれるが俺は迷わず戦士を選択した。

このゲームではレベルやステータスは存在しないが、そのかわりに熟練度というものが存在している。
言うなればこの熟練度こそがこのゲームの強さのカギとなっている。
例として、両手剣を強くしたい場合は両手剣を使っていれば自然と両手剣の熟練度が上がり攻撃などが強くなっているのだ。
なお熟練度を上げればスキルというものも使えるようになる。

俺は戦士の片手剣を強くしようと思っている。だが最初からモンスターと戦うのには気が引けるので初心者の訓練所へ行く事にしようと考えていた。

噴水広場の上には電子記号で現在の入場者数が書いてある。見てみ

ると現在の入場者は2万人を超えたり超えなかったりを繰り返し頻繁に数字が変わっている。
その奥に見える少々ぼろい看板に訓練所と赤い字で書かれていた場所を見つける。

そこに入ってみると外の印象とは全然違ったとてつもなく広い場所が広がっていた。
俺は早速、訓練内容から素振りを選択して素振りを開始する。
此処に来ているのは俺の他に数人くらいしか居なかった為なのか、とても静かでただ黙々と俺は素振りをしていた。なお訓練所で訓練をすると熟練度が増える。
だがモンスターを倒して貰う熟練度の量とは比べ物にならないくらい少ない。
だからすぐにモンスターを倒しに行く人がほとんどだろう。

素振りを開始して2時間が経とうとしていた。もうそろそろ切り上げないといけないだろう。俺はふと自分の片手剣の熟練度を見てみると0だった熟練度が2増えていた。
素振り1時間で熟練度が1上がるらしい。弱いモンスターを10体倒した時と同じである為一概にどちらが悪いとも言えないがモンスターは強くなってくると貰える熟練度も増えてくるので最終的にはモンスターを倒した方がいいのだろう。

ログアウトするために俺は手早くシステムを呼び出して一番下にあるログアウトボタンを押そうとして指が止まる。

「おかしいな？」

俺は確認の為もう1度同じ事を繰り返してみるがやっぱり変わらなかった。

「なんでログアウトボタンが無いんだ？」
俺はシステムの一番下にあるログアウトボタンの欄が空白になっている事を確認して原因を考えてみる。
「サーバーの問題か？　それとも俺だけがログアウト出来ないとか？」
結果を確かめる為に訓練所を出て広場に移動するともう既に大勢の人達で埋め尽くされていた。プレイヤーの皆は掲示板を見て驚愕している。俺はふとみんなの視線に合わせ入場者数の掲示板を目にして驚愕する。
そのおびただしい程の速度で数字が変わる掲示板は２００１２でストップしていたのだ。
「全員ログアウトする事ができない……」
俺は少し焦りつつも周りを見渡す。見ると中には焦っている人も居るがほとんどの人がその内ログアウト出来るだろうと思っているのか余裕の表情をしている者が多かった。
それだけではない。ログアウト出来ないのをいい事に４人のプレイヤーがモンスターを倒しに行ったのだ。
ログアウトが出来ない間、暇な俺は地面に座り、現在入場者の掲示板を眺めていた。すると――
「えっ？」
いきなり２００１２だった数字が２００１０に変わっていたのだ。

俺はすぐにログアウトボタンを確認する、他にも気付いた人が居たようで確認している人がちらほら見える。

「無い……？」

俺が指していた所はやはり空白の欄だった。頭が混乱し始める。
俺はなんとか今の出来事を整理しようとしていると先程狩りへ出掛けた４人のプレイヤーの内２人が帰ってきたのだ。
２人はなにやら顔が青ざめていた、そして片方の男が大きな声で喋り始める。

「皆！　聞いてくれ、さっき俺達と居た２人は戻ってきていないか？」

俺は首を傾げる、何故そんな事を聞くのだろう。此処に来るとすればＨＰが０になり戦闘不能になった時くらいしか……

「実はその２人は戦闘不能になって変な消え方をしたんだ！　モンスターのように砂になってサラサラって……」

そこで男の口が止まる。周りにも気が付いた人が居る様で静かになる。

「じゃあ、あいつ等は何処へ消えたんだ？」

男はもう顔面蒼白でへたり込んでしまう。俺も疑問に思った、戦闘不能になったのなら何故此処に戻ってこない？

結局、その２人の行方は全く分からないままだった。
そしてこのゲームからログアウトが出来なくなってから１０日が経

とうとしていた。
本当の事を言うとログアウトが出来なくなったあの日、プレイヤー全員に変なメールが届いてきたのだ。

内容としてはこうだ、先刻2人のプレイヤーが命を落とした。悲しいことだ、もうこのような事にはならないで欲しいと願う。
そして現在全プレイヤーにクエストを送っておいた。内容はボスを全て倒すというクエストだ。その報酬は此方の世界への帰省権という事になっている。
頑張ってくれたまえ、諸君

なんともふざけていて簡単なメールに思えたが2人のプレイヤーが命を落とした、という文面は少々疑問を覚えた。
なんで命なんて書いたんだ？　という疑問が……
それとクエストの内容だ。ボスを全て倒すというクエスト……
そして報酬が此方の世界への帰省権、まるで現実に帰る方法はこれしかないと言っている様な物だ。
最初は皆、混乱していたが１０日経ってやっと落ち着いてきたというべきだろう。
だが本当の事、俺は叫びたくて堪らなかった。

そのようなメールが送られてきた時、プレイヤーが取った行動はそれぞれに分かれた。
大半の人達はそのクエストを達成する為に訓練所、またはモンスターを狩りに行った。
もう半分の人達は広場で助けを待つ人達、俺は訓練所で素振りをしていたが……

今日も俺は訓練所に向かっていた。最初の5日間とかはプレイヤーで埋め尽くされていた訓練所もだんだんと人数が減って来たように

見える。
ほとんどの人が訓練所を出てモンスターを狩りに行ったのだ。
そして毎日減っていく入場者の人数、１０日経った俺にはある仮説めいたものが出来始めていた。なんで出来たのかは全く分からない、いつの間にか決定していた。

この世界で死んでしまってはならない――というおかしな仮説が……

戦闘不能になれば何処に行くかが分からない、今頃戦闘不能になったプレイヤーは平然な顔をして現実の世界を歩いているかもしれない。
だが俺の頭の中では戦闘不能になると死んでしまう、というイメージしかなかったのだ。
そして俺は今日も訓練所で訓練をしている。
今日している訓練はスキルの使い方だ、スキルというのは自分の身体の反射神経の速さで発動速度や攻撃速度が変わるらしい、その反射神経の速さを元にして高速の攻撃が出来るようになる、それがスキルだ。
俺は今、片手剣の基本スキルである【ロード】の使い方を訓練している。
ロードは基本中の基本でただ1回だけ相手を斬るというスキルだが速度が異常な程早い。
この速度こそが俺の反射神経の速度という事だ。ただ気を付けないといけないのはスキルを発動した後に隙が出来るという事だ。
スキルというのは当たれば大ダメージだが当たらなければ此方が大ダメージといういわば賭けのような技なのだ。
俺は目の前にある人形に向かってロードを放つ、刹那自分の右腕が残像を残すように動いて目の前の人形を両断する。

「速い……」

これが俺の正直な感想だった。
この後、俺は夜になるまでスキルの練習をしていた。
現在の入場者数は１９７０２人、１０日間で約３００人減った計算だ。
出来ればその減っている中にいつか自分が入る事がないように祈りたい。

◆◇◆◇◆◇

そして、ログアウトが出来なくなってから1年という長い月日が経った。

俺はというと今日がはじめてのモンスター戦だ。
1年の間寝る間も惜しんで訓練をしていた俺の熟練度はとてつもない数字になっていた。
片手剣熟練度５２００、他は零だが一つの熟練度を上げた方がいいに決まっている。
実質ほとんどの人が熟練度を一つに絞ってやっているのだから……
現在のボス攻略率は３０％、とてつもなく低い数字だった。
現在で俺みたいに一人、つまりソロでモンスターを倒している人は果たしてどれくらい居るだろうか？
ほとんどの人はチームという大人数で集まるグループを作っている。

現在有力なチームと言えば一番チームの数が多い【サイズ】というチームだ。
その次に女子だけで集まったと言われているチーム【ルーンナイト】、
その次におかまばっかりが集まったと言われているチーム【オカマンズ】、

上位三位はこれくらいだろう。
他にもたくさんのチームが存在している。

「行くか」

俺は訓練所で貰った特別な片手剣を2本、腰と背中に刺して始めてモンスターの居る狩場へと向かう。
今ある感情は恐怖や心配などではない、あるのは1年間もの間訓練所で訓練したという自信のみ――
俺はゆっくりと死ぬ確立が一番高い場所へと入っていった。

第2話

目の前に居る蜘蛛の形をしたモンスター、＜スパイダーウィック＞を斬り伏せる。
５０ｃｍという蜘蛛にしては巨体なモンスターを一撃で斬り伏せてもう１匹の攻撃を剣で防ぐ。
モンスターの強さにはランクという物があり１０段階で評価される。
１が一番弱く、１０が一番強い。ちなみにスパイダーウィックは正真正銘１、つまり弱いという事だ。

「はっ」

一息で呼吸を整えてもう１匹のモンスターに剣を突き刺す。
スパイダーウィックは壊れた機械のような悲鳴を発して砂となり消える。
ＨＰはあまり消費していないが一応ＨＰ剤を飲み回復しておく。

「これくらいならいけるな」

辺りを見回していると一際暗そうな森を見つけて興味が沸いてくる。

「……この森、入ってみようかな」

俺は暗い森の中に入り、モンスターと接触してもいいように腰の片手剣を抜いて慎重に歩き出す。
この森に入る前にあった看板を読まずに……この先、ボスモンスター出没という看板を見ないままに

ギルドまたはパーティとも呼ばれている3大勢力の【サイズ】、【ルーンナイト】、【オカマンズ】は一週間に1回、合同狩猟を行う。私、咲道桜花(さきどうおうか)もギルド、ルーンナイトのメンバー、というよりリーダーだ。
成り行きでこんなになってしまった男子禁制のギルド、頭の中で本当は男子にも入ってもらいたいと思っている。

「桜花、そろそろ行かないか？」
「あ、うん」

今、話し掛けてきたギルド、サイズのリーダーである咲道漣(さきどうれん)は私の兄だ。
兄に勧められるまま初めてやったゲームがこのグレイシャスオンラインだった。
初めてのゲームという事でやってみたらログアウト不能という現状、本当にいい迷惑だった。

「まぁ、少しは気に入ってるからいいけど」
「ん？　何か言ったか？」
「ううん、別に」

漣は不思議そうにこっちを見ていたがやがてもう一人のリーダーに話し始める。

「ノリカ、準備はいいか？」
「うふん、いいわよぉ。私・の・漣・ち・ゃ・ん」
「……」

ノリカという名前は偽装だ。誰にも本名を教えない。そしてオカマンズのリーダーだ。
そして、オカマだ。気持ち悪いがまぁ悪い人では無い。

「よし、今日は躍動の森のボス、ケルーシュを倒そうと思う！　レベルは5とやや強めだがこのボスを倒せば次のボスへの道が開かれる！　武器を取れ！　そしていつもどおり言うが戦いたくない奴は此処に残れ！　足手まといはいらない。行きたい奴は俺に付いてこい！」
「「「「おおお～～～～～～～～」」」」

漣の掛け声で皆があわせて咆哮のような声を出す。これはボス戦の前の儀式みたいなものだ。そして今から挑むボス、ケルーシュは薄暗い森に居る人面の木だ。

「続けーー！」

漣の声で皆が皆後を追っていく。幸いケルーシュの棲家はこの近くの森に存在している為、
すぐにつくだろう。
私は気を引き締めて列の最前列である漣とノリカの隣に並び歩く。
一応リーダーの身だ。私の使う両手剣の熟練度は１００００を超えようとしている。
間違いなくトッププレイヤーである。漣も大剣の熟練度は１００００を超えているし、
ノリカだって大槌（ハンマー）の熟練度は１００００を超えようとしている。
そんな考え事をしているともう森に着いたようだ。本当に近い

「なんだ？」

漣は急に言葉を発する。ノリカや私も怪訝そうに漣の横顔を見ると次第に青ざめていく。

「桜花、何か声がしないか？」
「え、声？　そんなの何処からも……」
「走るぞ！　サイズのメンバーは此処で待て！」

私の言葉は最後まで続かなかった。漣は私の言葉を最後まで聞かずに一人で森の奥に入っていってしまった。

「んもう、せっかちなんだから。私の・漣・ち・ゃ・ん。おい！　お前ら、アタシ一人で行くから此処にいろ？　いいな」

途中で口調が男っぽくなったノリカも漣の後に続く。

「もう！　ルーンナイトのメンバーは此処で待機！」

2人の後を追い私も走り出した。
森の周りには同じ景色が広がっていて酔いそうになる感覚を堪えながら必死にノリカの後を追ってやっと追いついた先には驚くべき光景が広がっていた。

そこに居たのは人面の木のようなモンスター、ケルーシュ。これは倒すべき敵である事は分かっている。
そして――そのケルーシュに一人で挑んでいる男は一体何者なのだろうか？
その前に一人で敵う相手ではない！　私はすぐさま走り出し応戦しようとするが、
兄に手で制される。私は驚愕の表情で兄を見るが兄はその先、つまり男とケルーシュの方を見たままジッとしている。

見ていろ、という事なのだろう。そんな事出来るわけが無いと思ったが兄に手で止められている為、動けない。そして、

遂にケルーシュが動き出した。

俺は人面の木の攻撃を剣で受け止める。だが予想以上に重い。いとも簡単に破られてしまう。

「ぐっ」

俺は反動を受けながら地面に転がり、立ち上がる。
ケルーシュは次の攻撃態勢に入ろうとしている。

――これは勝てそうにもないな。

俺は自分の事なのに冷静になる、そして結論を導き出す。

本気を出そう――と、

足の位置を変えて独特の立ち位置を形成する。言うなれば剣を持った右手は力が抜けたようにブラーンとしている。
そして俺は静かにケルーシュの攻撃である木を見据える。

攻撃してくる木は5本、導かれる避け方、

「遅いよ」

俺は全ての木の攻撃を見切り、避け、そして胴体に片手剣を突き刺す。
声にならない悲鳴が森に響く。
胴体での突進攻撃が迫り来るのを俺は後ろに飛んで避ける。
右手の剣を回しながらケルーシュに言う。

「さぁ、反撃開始だ」

俺は舞を踊るように動き、攻撃を全てかわして、懐に剣を突き刺す。
その後の攻撃も飛んで避け、そして頭の天辺に斬り込む。
ケルーシュのＨＰはわずかしか減らない。
元々俺は訓練所にいたから熟練度はあまり大したことがない。だから攻撃は弱い。

当たったら死に近づくこの世界、だが逆に、“当たらなければいいだろう”
避けて斬り、避けて斬り、避けて斬り、避けて斬り、を繰り返し、着実にＨＰを減らして行く。
これが俺の本当の戦闘方法、訓練所で覚えた足捌き、身体の体重移動、避けながら斬る訓練、どれもつらかったが、やり遂げた俺に、お前は勝てるのか？

「勝てるかな？」

嘲笑い人面の木を見る。その姿は怯えているようにも見えたし怒り狂っているようにも見えた――

第3話

目の前の人面の木、＜ケルーシュ＞の懐に飛び込んで斬り込む。
反撃である木の枝の攻撃を姿勢を低くして避けて、根元に突き刺す。

「ギギギギギギギギ」

ケルーシュが不気味な声を放ち、枝の葉っぱが鋭いナイフのように形を変えて此方に向かって来る。
それを後ろに跳躍してかわし、地面が足に着いた途端にまた接近、俺は右手の片手剣を高速で投げて、ケルーシュに命中させる。この速度で投げられるといえばスキルくらいしかない。
ケルーシュの深くまで刺さった片手剣をわずかに遅れて抜き取り、下から上に斬り上げる。
そして上段から縦に一刀、下から剣を逆手に持ち替え右上斜めに斬り上げる。そして水平に片手剣を薙いで追撃、
このスキルのお蔭でケルーシュのＨＰはもう４分の１くらいだ。
最後に逆手で持ったままの剣をケルーシュの胸元に突き刺す。
――スキル、≪ペナルティブレイク≫、このスキルは片手剣専用スキルの上に訓練所で練習しないと習得できないスキルだ。驚異的な速度で片手剣を投げてから始まり、刺して終わる５連撃スキル。しかも全ての攻撃に＜クリティカル判定＞がつく反則的スキルだ。
これのお陰で俺の攻撃力は補われていると言っていい。

「剣の味はどうですか、って言っても聞こえませんか……」
「じゃあトドメで」

俺はケルーシュに向かって走り出し、片手剣の攻撃で残り少ないケルーシュのＨＰを全て消し飛ばした。

不気味な声を上げて倒れて砂となるケルーシュを見ながら俺はふと後ろの視線に気付く。

「で、貴方たち3人はなんで見てるんですか？　助けてくださいよ」

後ろの3人の方を向いて文句を言うと一人の女子が咄嗟に頭を下げてくる。

「ご、ごめんなさい。私はギルド、ルーンナイトのリーダをやっている咲道桜花（さきどうおうか）と言う者です。あの、見ているだけですいません」

桜花と名乗る女子はルーンナイトのリーダーで、んっ？　リーダー？　ルーンナイト？

俺ってひょっとして今、すごい大変な人に謝らせちゃった？

「俺はギルド、サイズのリーダーで咲道漣（さきどうれん）だ」

「うふん、私はギルド、オカマンズのリーダー、ノリカよ」

スラッとした男と変なオカマ……そしてサイズ、オカマンズ、導き出される回答。

「すいっませんしたっっっ」

「なんで謝るんですか！　私達が手助けしないからいけなかったんですから」

「そうだそうだ～、何故助けなかったのだ桜花、全くお兄ちゃんは恥ずかしいぐぁ」

桜花は笑顔のまま隣の男に蹴りを入れる。男は腹を抑えたままうずくまってしまう。

正直、怖い

「それよりぃ、うふん、この子の剣捌きと足捌きの事を聞きたいわね。うふん」
「息継ぎにうふんって言ってる！」
「そうね……確かに変よね」
「ですよね息継ぎ、変ですよね」
「貴方、どこのギルドに入っているの？」
「そっち！？」

俺は心底驚いた、なんたってギルド3大勢力の2人と話しているのだから……
そして聞かれた質問に正直に答える。

「えっと。俺ソロなんですよね……」
「へ？」
「うふん？」

桜花とオカマは口をあんぐり開けて固まっている。
しまったぁ――！　ソロなんて言うんじゃ無かったぁ～～！

「あ、あの～間違えました。ソロじゃ」
「ルーンナイトに入らない？」
「サイズに入らないか？」
「オカマンズ、来なさいよ」

……アレ？　なにこの状況、もしかして俺、誘われてる？　ギルドに？　いやいや3大勢力だよ。ありえないでしょ、ないない

「あの～冗談とかあまり嬉しくないような……」
「冗談じゃないよ？」

「本気だ」
「オカマンズに来なさいよ。うふん」
マジで？　どうしよう。俺これから一人で生きていくとか言ってなかったっけ？
でも待てよ？　俺が入れるのって元々一つじゃないか？
「でも俺、女じゃないのでルーンナイトには入れませんし、オカマでもないのでオカマンズも無理ですよね？　そうなると結果的にサイズしか入れなくないですか？」
「……あ」
「……うふん、まさかオカマが障害になるなんて……」
「だろ？　さぁ早く俺の所に来い。サイズに入ろうではないか」
「お兄ちゃん、ちょっと死んでてね？」
「ちょ、桜花？　待ごぉあ」
……うわぁ、マジで殺ったよ。てかサイズのリーダーさん失神してるじゃん。
お兄ちゃん？　兄妹だったのか。それはそれで凄いと思うが、
「すいません、名前をお聞きしてもいいですか？」
「あ、ああ。俺は藤堂玲って言います。皆さん、初めまして」
「玲くん、そっか、玲くん早速だけど街に戻らない？　話はそれからでいいでしょ？」
「あ、まぁはい。いいですけど漣さんはどうするんですか？」
「ノリカさんが運ぶわよ」
「うふん、私の漣ちゃん。私が運ぶわ」
うわぁ、片手で担ぎ上げたよ。オカマの力、恐るべし……

「じゃあ出ましょう」
「はい」
「漣ちゃん、今目覚めのキスをぉ」
「おきてる！　別にしなくてもいいぞ！　ノリカ」
「もう、漣ちゃんはぁ初心なんだからぁ」

俺、漣さんじゃなくて良かったと思う。うん俺生きる勇気が沸いて来たよ。
そんなこんなで町に辿り着いて、なんか途中でメンバーと合流して、大軍隊で町に帰還して、今は漣さん、桜花、ノリカとで話している訳だが……

「最初は」
「グー」
「じゃんけんポン！」
「……どうしてこうなった」

現在、３人は俺を何処のチームに入れるかのじゃんけん大会中である。
現在、２３戦２３引き分け、運がいいのか悪いのか分からない数字だ。

「あいこで」
「しょ！」
「またあいこ！」

そろそろ止めて欲しい。俺はまだギルドに入るといった訳じゃないんだが……

「勘弁してくれ……」

「またあいこ！」
「あ～お兄ちゃん、今後出しした！　反則負け～」
「違う！　これはタイミングが」
「うふん、そろそろ負けを認めなさいよ。私が玲ちゃんを立派なオカマにするんだらぁ」

……最後の言葉を聞いた途端、悪寒が走ったのは気のせいか？
出来れば願おう！　……気のせいであってくれ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3685z/

グレイシャスオンライン

2011年12月14日00時52分発行